

赤^{あか}いコードロン・

シムーン

森川^{もりかわ}
成美^{しげみ}



絵
吉田尚令

装幀
大岡喜直 (next door design)

一 女子のとなり

六年生になってクラス替えをしたので、新学期早々に席決めがあった。うちの学年は、机を二人一組でくつつける方式だ。しかも、なるべく男女が並ぶように、ということになっている。

基本的には背の順で席が決まる。ぼくはクラスの男子のうちで一番背が高い。だから、去年はそれで運よく一人席になった。つまり、人数が奇数で男子が多かったわけだが……。

実は、ぼくは、女子が苦手だ。

一人っ子で、いとも全員男子ということもあるかもしれないが、だいたい女子が話していることのほとんどが、暗号みたいでよくわからない。

だが、今年は男女同数になってしまい、どうしても女子と並ばなきゃならなくなった。となりに来たのは、緑川すみれという子だった。初めていっしょのクラスになった、学年で一番背の高い女子だ。背の順ならこうなるのはまあ、必然だった。

「大空翔くんね。どうぞよろしく」

すみれは、にこつと笑いかけてきたけど、ぼくは返事をせず下を向いた。いじわるで返事をしなかったわけじゃない。女子にどういう顔で、どんな声で、なにを話したらいいかわからなくて、あれこれ考えているうちに、つい、そうなっちゃったんだ。

いやなやつだと思われただろうな。

でも女子にどう思われようと、ぼくは平気だ。な、はずだ。むしろこれから、すみれと口をきかなくてよくなったんじゃないのか。

思ったとおり、それから、すみれは話しかけてこなくなった。ラッキーだ。

だが、五月の連休明けの休み時間のこと、ぼくはふと、すみれの机の上を見て、大声をあげてしまった。

「コードロン・シムーンだ！」

すみれは、びっくりしたように、ぼくを見あげた。

「知ってるの？」

「もちろんだよ」

コードロン・シムーンは、一九三〇年代にフランスのコードロン社が製造した飛行機のシリーズの名前だ。旅客機、郵便機として使われたが、第二次世界大戦では、フランス軍の連絡機としても使用されていた。シムーンというのは、砂漠に吹く砂嵐の意味だ。

すみれの机の上にあったのは、そのコードロン・シムーンの模型の写真がのった下じきだったのだ。すみれは写真を指さして言った。

「大空くんがこの飛行機、知ってるなんて、うれしい。すごくかわいいよね」
かわいい？

今度はぼくがびっくりする番だった。

ぼくは飛行機マニアだ。特に第一次世界大戦の初めごろから、第二次世界大戦が終了したあたりまで、つまり一九一四年から一九四五年ぐらいまでのものに興味がある。

だけど、そんな話を学校でも、みんなついてこれなくて、目を白黒させるだ